
手押し車の二人旅

新潟のアヒル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手押し車の二人旅

【Nコード】

N4676K

【作者名】

新潟のアヒル

【あらすじ】

おっさんと体の不自由な女の子の二人旅です。

一話目【旅の途中の山道で】（前書き）

初めての投稿になります。いたらない点や誤字脱字などで気分を害してしまった場合はすいません。

一話目【旅の途中の山道で】

……ガラガラガラガラ……

森の中の道を四角いカゴの形をした手押し車を押しながら男が歩いていた。

男は無精髭を生やしており、ほどよく引き締まった体をしている。背中には袋を背負っており、腰にはつばのない刀を帯おびていた。

……ガラガラゴロガラ……

男は特にまわりの景色を眺めたりはせず、ただ黙々と前を向いて歩き続けている。

やがて、道は少しずつ山道さんどうの様になっていき、右は急な上り斜面というより絶壁、左は険しい崖になっていた。また、崖の下からは水の流れる音も聞こえてきている。

そんな谷の中腹に差し掛かったころ、

「……うん」

男が押してるカゴの中から微かな声が漏れた。

「起きたか？」

男はカゴの中に声を掛ける。

「……あう？」

カゴのなかの女の子らしき人物はまだ少し寝ぼけているがかまわず男は続けて語りかける。

「まだ村には着かない。もう少し寝てて構わないぞ」
「……うにゆう……」

女の子は眼をこすりながら身を起こした。まだ少し頭が左右に揺れている。しばらく前方を見ながらポーツとした後、間延びした声で男を呼んだ。

「……おっさーん」

「ん？」

「バーカ」

……ガラ…ガラ…ガ……

男はゆっくりと立ちどまり、今しがた声が聞こえてきたカゴのなかを覗き込んだ。

男の視点からだとその人物の後頭部が見てとれる。

木漏れ日に照らされて淡く光って見える腰のあたりまで伸びた髪が見えた。さつきまで寝てたせいか、ところどころ寝癖が跳びはねくしゃくしゃになっている。

「……………」

さて、どうするかと少しの間、男は考える。

「あれー？進まんのか？おっさーん」

「そつだな」

……ラガラゴロガラ……

また男は歩き始めた。

「なんだかもう山になってたんだねー、あとどれくらいで着くかなー？」

……ガラガラガラ……

「んあ？おーいおっさーん崖に近づいてるよー危ないよー？」

……ガラ……ラ……

「そうそう一度止まってから方向を変えて……」

クイッ

「……ろ？……おっさーん何だか左に傾いてる気がするよー危ないよー？……おーいおっさーん聞こえてるー？無視すんなー、このままいくとヤバイよー落ちるよー私落ちるよー？」

男は返事をせず黙って少しずつカゴを崖の方に傾けている。

「ねー聞こえてるー？頼むから返事してー、というかこれ以上傾けないでー、マジで危ないからさー、ねー危ないって三回言ったよー、おーい聞こえねーのー？聞こえねえのかー？聞こえねーんだなー？よーし、バカーアホー」

グイッ

「スイマセンゴメンナサイ！私が悪うございました！だからこれ以上は勘弁してえ！許してえ！」

男は何も言わず黙々と傾け続ける。

「チクシヨー！コラー！やめろー！やめてくれー！ヤメレー！シャレになってねーぞコラー！！」

男からは返事がない。

「何か言えやー！つて、え！ちよつともう無理！待って！マー！ア
ー！ギャー！ー！ラリルレリヨリリヤルラー！ー！ワー！ー！
！ー！」

「ゼエ……………ハア……………グスン……………あうう……………もうオヨメに行けない」
「……………」

(……………少しやりすぎたか)

そう思い、男は謝ろうとする。

「すまな「おっさんのバカ……………アホ……………いっぺんしねハゲ……………」

……………。

グイッ

「ヤメレーーーー!!」

非常に大きな声が山に響き渡った。

二話目【村】（前書き）

いぢやってみると『書く』というのは自分にとって難しいものだと
言うことを思いしらされた。

あまり楽しくない文章とは思いますが、できるだけ楽しくなるよう
頑張ってみようと思います。

二話目【村】

山道を抜けて麓の村まで二人はやってきていた。

「やっとついた……」

カゴのなかの女の子は少しやつれた様な顔をしてそう言った。
その様子に男が少し心配そうに話しかける。

「大丈夫か？」

「あのさ、誰のせいで大丈夫じゃなくなってるかは解ってるよね？」

女の子の苛立つ様子に男は困ったように頭をかく。

「いや、悪かった。流石にやりすぎたとは思ってる」

「けっ、そんな言葉で今さら謝っても許されるとは思うなよ。私の心はあれで深く傷ついたんだからな。しばらく反省してやがれ」

そう言うと女の子はカゴの底に体を横たえて目を閉じる。

男はその様子に頭をかくのをやめたため息をつく。女の子にこれ以上話しかけるのは諦めたらしく、ここにきた目的である村長の家を探すことにした。

あたりをゆっくり見渡すと少し離れた所に小さな店があるのが目についた。その店の人に場所を聞こうと男は歩き始めた。

……ガラゴロガラ……

カゴの下の車輪が地面を擦る音があたりに響く。あたりに人気は

なく、これといった物音がしないためかいつもより大きな音に聞こえた。

「すびゅ〜、くか〜、くび〜」

しばらく歩くとカゴのなかから寝息も聞こえてきた。

男がカゴのなかを覗き込むと熟睡している女の子の顔が見える。

「速いな……」

男は女の子の寝るスピードに対し、そう独り言を呟いたあと改めて店のほうに歩を進めた。

「なっとうに牛乳は間違いだよ」

途中変な寝言が聞こえた様な気がしたが無視して男は歩き続けた。

店員に道を教えてもらった後、二人は村長の家に向かった。挨拶とここに来た元々の用である届け物を渡して、家を出る。

「ぶっ……」

時間が経ったのかあたりは赤い景色に変わっていた。地平線が茜あかねに染まっている。真上の空はまだ綺麗な水色が残っていた。

「遅えよーおっさん」

「すまん、待たせた」

女の子は男が村長の家に入っていた間に起きてしまっていたようだ。男は女の子に軽く謝りながら駆け寄りカゴを押し歩きたした。

……ガラゴロガラゴロ……

しばらくまわりの風景を眺めながら女の子はカゴが揺れるのに身をまかせた。

あたりからは静かに虫の音が聞こえてきていた。西の方では夕日が少しずつ山に吸い込まれていくのが見える。

女の子は男の顔を見上げてから

「これでもうこの用は済んだの？」

そう問い掛けた。

「ああ、すぐに出発するぞ」

男が言ったことに一瞬「え」という表情をしたあと女の子は男を睨みつける。

「……おい、おっさん、まさか泊まってかねえつもりか？」

「ああ」

あたりは暗くなつてきている。おそらく今から村をでても途中の山で二人が野宿することになるであろうことは誰でも想像できる。

「……おいこらおっさん、テメエの頭は虫でもわいてやがんのか？ つつかわいてるだろ？ わいてるよな？」

「おい」

いきなり失礼なことを言う女の子に男は抗議しようとするが、女の子は気にせずそのまま話し続ける。

「せつつかく村に着いたんだぞ、普通少しくらいのんびりしてこうと思わねえのか？ 思うだろ？」

それを聞いて男はほんの少しだけつらそうに口を開く。

「……すまない……急ぎの用でこのまま北に向かわなければならなくなつたんだ。許せ」

だが男の態度にわざとらしいものを感じた女の子は、頭の中で何かをはじけとばした。

「許せえ？ 許せだと……？ ふざっけんじゃねえぞ！ てんめえ何日野宿したか解つてんのか！ 10日だぞ10日！ おっさんみたいに元々心の底まで腐つてる連中なら平気だろうがそんなのと私を一緒にすんじゃねえ！ 私が、私がこの日をどれだけ待ち望んできたと思つてやがる！ 10日だぞ10日！ わかつてんのか！ 雨の日も風の日も雪の日さえも黙つて耐えてお前さんについて来てやつたじゃねーか！ なのはどうして！？ おっさんは私を人形かなにかだとも思つてんのか！？ 私だつてちゃんと生きてるんだぞ！ だから、だから今日だけは泊まらせてくれえ！ もうこれ以上おっさんのペースに合わせてた

ら生ゴミになっちまうよ！そして私は鳥達につつつかれて白骨死体になって野ざらしにされるんだあ！そしておばさまがたの井戸端会議のネタあつかいされるんだあ！嫌だー！そんなのだけは嫌だー！だから今日だけはー！今日だけはー！」

「村長に聞いたが、そもそもこの村に宿はない」

男がそう言うとしばらくの間、女の子は灰になっていたが気を取り直して、

「だ、だったら銭湯があるだろうが！せめて、せめて風呂にくらいはいらせてくれ！頼む！」

と言った、が

「それもない、あきらめろ」

男はにべもなく返答する。今度こそ女の子は灰になった。

「ああ……………運命はかくも私に試練なものなのか…。神すら私を見放したか……。誰かー私に宿をわけてくれー」

「無理なものは無理だと言ってるだろう。それとあまり大きな声を出すな。近所迷惑だ」

「……………」

「うるさい！おっさんもう黙れ！今回の件でおっさんに対する私の信用度はゼロだよ！ゼロ！ナッシング！」

「……………あの」

「人の信用をことごとく裏切りやがって！だいたいおっさんはいつも私に対して心くばりが足りないんだ！足がないだけに足りないだ畜生！バカ！アホ！何言わせんだボケエ！」

「あの！」

「おっさん！聞いてんのか！そもそも…も？」
「あ、どうも」

二人は声がした方に顔を向けた。そこには若い女性が立っている。

「すみませんお話し中のところ…」

そう言っつて女性はわざわざ頭を下げてる。男も慌てて頭を下げた。

「ああ、いえ気にしないで下さいよ。こいつが一方的に話してただけなんで…」
「ナニ？」

女の子はまだなにか話したそうな顔をしたが男は無視する。

「さきほどはどうもありがとうとございまして。おかげで村長の家までたどり着きました」
「いえ、どう致しまして」

男と女性は顔見知りのようだ。女の子はそれを見て男に問い掛ける。

「おっさんこの人は？」
「さっきこの人に村長の家までの道を教えてもらったんだ。お前は寝てたから知らんだろうが。ちゃんとお前も礼を言っとけ」

それを聞いて女の子は女性に頭を下げて言う。

「すみませんどうもその説はうちのバカがご迷惑おかけしました」

「コソ」

男は女の子の頭を軽くこずいた。それに対して女の子がまた騒ぎ出そうとするが男はすばやく女の子の口を塞いだ。「むーむー」と女の子は何か言おうとしたがやがて諦めた。その様子を見て女性が笑う。

「あー失礼しました。ところで何かご用だったでしょうか？」

男が問い掛けると、あ、はい、と彼女は返事し、

「あの、もしかして宿をお探してしたか？」

と言った。

「あ、いえ今日は……」

もう泊まらない、そう伝えようとしたが、

「はい、そうです！宿探ししてます！どっかにいいところありますか!?!?」

男の手を引っぺがした女の子が男の言葉を遮るおさえかるように言う。

「やっぱりそうでしたか。もし、お困りでしたら私の家に泊まりませんか?」

ニコニコと笑みを浮かべながらそう答える女性。柵はから牡丹餅びんもちのような魅力的な提案ではあった。だが男は断ろうと口を開き、

「ですが急ぎ……」

「はい！宿が見つからず困ってました！泊まらせて下さい！」

男の発言は女の子によって再びかき消された。

「おい、急ぎの用があるって言わなかったか？」

「まあ、いいじゃん！泊くらいさーそのぶん急げばなんとかなるっしょっ？」

だが……しかし……などと男が何か反論をするがそのたびに女の子は大丈夫大丈夫と言って男を納得させようとする。その態度に男は観念して、

「まあ……飛ばせばなんとかなるかもしれんが」

と言ってしまふ。その言葉に女の子は喜びの笑みをつかべた。

「なら大丈夫じゃん今日は泊まらせてもらおうよ」

「だが……飛ばせば、だぞ」

なぜか男は強調して同じことを言う。

「……………」

女の子の顔は一変して苦虫を噛んだようになり、うつむいて何かを考えていたが、

「……だいじょうぶだいじょうぶなんとかなるさ！多分！」

そう結論づけて先を歩く彼女の後に続くよう男をうながす。男は歩きだしながら、

「……あとで泣き喚いても知らんからな」

そう、女の子を不安にさせる様なことを言った。

「だいじょうぶ……だいじょうぶだから……」

……多分。ほそつと再度、同じ言葉を付け加えるように女の子はそう言って顔をカゴの底に向ける。その表情は覗くことはできないが、きつと泣きそうな顔をしていたに違いないだろう。

三話目【位牌】

「それでは今から料理をつくり始めますから少しの間、ここでくつろいでいて下さいね」

女性は二人を居間に案内してからお茶を入れてそう言うと、部屋の奥の方に入っていった。恐らくそちら側が台所になっているのだろう。

「いやーいい人だよねえあの、泊まらしてくる上にわざわざ手料理までご馳走してくれるって言うんだからさあ」

女の子は「ああ神様はまだ私を見守ってくれてたんですね。その御心に感謝いたしますですよ」などと言いながら手を組んで蛍光灯を仰いでいた。

男はテーブルに置かれた茶を啜りながら部屋のなかを見渡して見た。

床には白い毛でできた絨毯がテーブルの下敷きになるような形で敷いてあり、さらにその絨毯の外側、壁際には様々な鳥の置物が乗っている戸棚がある。また、その横には小さな仏壇が置いてあった。男はその仏壇のなかを覗きこんで見た。

なかには二つ位牌が安置されており、その下には中年の男女が笑って写っている写真も置いてあった。

二人が女性の家に泊まることが決まった後、男は女性に家族の事について聞いてみていた。

そのとき女性は、

「今は一人で暮らしています」

と話していたがこれを見ればその理由も察しがつく。

「おっさん、何見てんのさー」

男が見ているものに興味を示したのか女の子はゆっくりとほふく前進で男のほうに近づいていく、その様子に男は女の子の足があるであろうあたりに視線を向けた。

女の子の足は膝ひざから下が無い。

両足とも膝が足の先端部分となっており、元からそのような形であるかのごとく流線型で、まるで先が丸い大根のようであった。

さきほども家にあがる際、カゴから降ろした女の子の姿を見て、女性が少なからず驚いていた。

女の子は、

「別に気にしないでいいよ」

と軽く流してはいたが。

「なに、これ？」

男の膝の上まで登ってきた女の子はそこに腰を落ち着けて男が見ていた物、仏壇を覗いて首を傾げた。

「これ、とはなんのことだ」

「いやなんというか……その、『これ』はなに？」

女の子は仏壇の前に手を広げ、回りの空間を手の平で撫でるようにして言う。

「仏壇だろう。お前、見たことなかったか？」

男がそう聞くと女の子は「うん」と軽く頷く。

「これは仏壇と言って仏や亡くなった人を仏として祭って置いておくための物だ」

「ほとけ？」

「神様のことだ」

男の答えに「へえ……」と女の子は少し感心したように呟き、

「今日は本当にありがとうございました」

と言って手を組んだ。その様子に男は女の子に気付かれない様に静かに苦笑を漏らす。

「でも、なんでほとけを祭っとく必要があるの？」

「お前、その発言は罰当たりな気がするぞ……。そつだな……。さつきお前がやったみたいだに礼を言うためじゃないか？」

「ぬ？」

「それで、またいいことがある様にとお願いしたりするためにこうやって祭ってたりするんじゃないか？まあ、俺もあまり詳しいことは知らんけどな」

男は再び茶を啜る。

「ふうん……………」

女の子はわかったのかわかっていないのかそう相槌を打ったあと、

「じゃあ亡くなった人を祭るのは？」

と違う質問を投げ掛けてくる。

「それは……………」

男はしばらく口ごもった後、

「自分で考えろ」

そう答えた。

「…………ごめん、バカなおっさんに聞いても分かる訳無いよね」

男はその声を聞いて湯のみを音も無くテーブルに置き、女の子の腰を持ち上げ「バっ！尻さわんな！」天井に向かって放り投げた。

「みきや——！——！」

叫び声を部屋いっぱいに響かせて女の子は天井にぶつかると言う程の距離まで鼻先を近づける。男からは一瞬『それ』が大の字で天井に張り付いている様に見えた。やがて重力に引かれて落ちてきた『それ』を男は両手でキャッチする。

突然のことに女の子はショックで目を回していたが、すぐに気を取り直して、

「な、な、何してくれとんのじゃこらボケー！」

と男に文句を言いながら殴りかかろうとした。が、

「ハッしまった！」

体を掴まれているせいで動くことができない。

「ちきしょう！はなせ！はなせー！」

「何を話そうか？」

「離せはなつってんだろがー！」

「昔々あるところにお爺さんとお婆さんが」

「だまれー！」

しばらく女の子はじたばたと暴れるが男の腕はびくともしない。

やがて暴れ疲れたのか動きを止めた。

「……………」

抵抗をしなくなったのを男は確認して、ゆっくりと手を離す、が

「バカめ！しねい！」

その時を待っていたとばかりに女の子は男の顔面に拳をはなつ。

パシッ

「な、なに!？」

だが至近距離から繰り出されたはずの拳は楽に男の手に受け止められ、男は再び女の子を上¹⁵⁵に投げ飛ばした。

「高い高い」

「ヤメレー!!!」

しばらくそんなやり取りを二人は繰り返した。

「ゼエ、ハア、ハア……………もう、降参……………」

「……………」

「……………まいりました、た、から、もうやめ……………て」

男は恐る恐る女の子の拘束を解く。

今度こそ反撃はなく、女の子は男の膝の上でだらりとごっごぶせで横になった。

「あゝあついゝしぬゝ」

「暴れすぎだ。しばらく大人しくしとけ」

ぐぬっ、と女の子はくぐもった声をだし、そのまま力尽きた様にくったりとする。完全に憔悴せうすいしきっておりもはや体を動かす余裕はない様に見えた。

「おい」

男は完全燃焼し燃え尽きた女の子に向かって声をかける。

「ぬっっ？」

女の子はあおむけになりながら返事をするがその目は男を向いておらず、どこか意識の外で返事している様だった。

一応は反応を返した女の子に向かって男は言葉を告げる。

「馬鹿」

「……………」

ヒュッヒュッと女の子が拳を振るう音がするが男には当たっておらず天井に向かって空を切った。

「自分が言われて嫌な事は人に言うな。わかったか？」

「しね」

聞こえてるのが聞こえてないのか、なにも反省しようとしなない態度の女の子に男はため息をつく。

女の子は放っておくことにしたのか男は三度、みたひ茶を啜りながら仏壇を覗き込んだ。

位牌には亡くなった年と日にちが書いてある。二つの位牌には同

じ年月日が書かれており、まだそんなに年月は経ってないようだ。

「……………」

男は黙って女性が入っていった部屋を見ながら茶を啜る。

「……………む」

やがて飲み続けたせいで湯のみが空になったのか、男は少し湯のみの底を見てから立ち上がろうとした。が、女の子が膝に乗っていたのでその動作を止める。

「……………」

しばらく男は女の子を眺めていたがやがて決心し、湯のみをテーブルに置き、女の子を持ち上げて脇にどけようとする。

「わきゃー！もう投げないでー！」

「落ち着け」

女の子がまた慌てて抵抗しようとしたが男は冷静に女の子を押しさえ付けながら脇に降ろす。

女の子はそこで再び力尽きてごろりと絨毯の上で丸くなった。

「寝るなよ」

男はそう一言だけ声をかけて、湯のみを持って台所があるであろうところに向かっていった。

四話目【日常茶飯事】（前書き）

話の展開が素晴らしく遅いとは気付いています。少しはシーンをカットしたらいいんじゃないかとも思います。が、なかなか決心が付きません。

これを読む人がどう思うかはわかりませんが、とりあえずはこんなペースで続けていこうかなと思っています。

それにしても執筆するのが遅いと思う今日このごろ。 (- -)

四話目【日常茶飯事】

食卓。

そこには女性の手によって作られた食事が並べられている。どの食材も丹念に、丁寧に作られており、食欲をそそる香りが部屋中を包み込む。さあ、俺達を早く食べてくれと、様々な食材が訴えかけている様でもあった。

食事の場は人を歓迎、または交流をするときに使われる常套手段の一つである。人と人との付き合いの中に登場し、相手に歓迎の意を伝え、お互いにコミュニケーションを計る場として機能する。親睦を深め合うだけではなく、取引の場として使われることもあるだろうか。何にせよ、そこには様々な言葉の応酬があることが多く、たとえそれが無くとも、自然と温かな空気であるのが食事の場として正しい在り方なのだろう。

だが

「……………」
「……………」
「……………」

食事を始めた三人の回りには重苦しく、緊張した空気が張り詰めていた。

男はそれを気にしていないかの様に黙々と箸を進めているが、女性には不安を隠せず戸惑うばかりである。

暫く、カチャリ、カチャリと食器が触れ合う音と食材を咀嚼する音のみが聞こえてくる。

女性はときどきチラリと二人の顔を窺う様にして見ては、何か話し掛けたそうなそぶりを見せているが、気付いていないのか、二人

はその様子に全くふれようとしなない。

「……………」

女性は音を立ててスープを飲み始めた。行儀が悪いが、二人が少しでも自分に反応してくれる様に祈っての行動なのだろう。

女性は暫く二人を観察しながらスープを啜る。

「……………」

「……………」

「……………」

だが二人はその様子に目もくれなかった。やがて女性は何かを諦めたように両肩を落とし、もそもそと食事を続けることにした。

「……………?」

結構な時間の中、黙々と食事に集中していた男だったがここで、はたと女性が居心地悪そうに俯いて箸を進めているのに気付いた。男は箸を止め、女性をじっと見つめる。

「……………」

女性は男の目線には気付いていない。全身の力が抜けきったかのごとく肩をだらりと下げて伏し目がちに、もそもそりと機械的な動作で箸を動かしていた。

「……………」

男はスープが満ちたお椀を持ち上げ、ずずっと一口飲み込んでか

らばつりと口を開く。

「……………このスープ美味しいな」

「え？」

どんよりとした空気を背負いつつあった女性が顔を上げて男を見る。男は碗を軽く持ち上げて

「このスープ美味しいな」

と今度ははつきりとした声で言った。

その声を聞いて女性は徐々に頬を緩ませる。

「あ、ありがとうございます…す」

今まで沈黙していたせいで少し呂律ろれつが回らない。女性は顔に紅葉を散らしてまた俯いてしまう。また少しぎこちない空気が流れたが、さきほどの緊張感と比べれば随分と温かみのあるものになってきていた。

男は女性の様子を窺いながら再度声を掛ける。

「しかしこれは今まで食べたことのない味だな。料理の名前とかはあるのか？」

「あ、はい。ありますよ」

女性が顔を上げて頷いた。

女性は料理の説明を始める。最初こそぎこちなく言葉数ことばかずも少なかつたが、次第にお互いは打ち解けていき、それに伴ともなって少しずつ部屋の中の緊張感もこそげ落ちていくようだった。

やがて話しは、男がどうやってここまで来たのかという話題に移

り変わっている。

「それじゃあ、わざわざあの山を越えて来たのですか？」

「ああ。ここにはそれが近道だったからな。下手に回り道をするよりいいと思ったんだが……。はあ、なかなか骨の折れる道程だったよ」

「すっごいですね。私も一度だけ登りましたが途中で引き返してしまいましたよ」

「……あれを登ったことがあるのか？」

「はい、少し前に」

「……俺が言うのも何だとは思うが、あんな山によく登ろうと思ったな」

「あはは……。まあ、色々和多感な時期でしたので」

会話をするに従って、あたりは食卓に相応しい和やかな雰囲気になってきていた。女性は男に気付かれない様、小さくホッと胸を撫で下ろし、安堵の笑みを浮かべる。

だが

「……………」

女性は男の横に視線を逸らすと再びその表情を固くした。

「……………」

女性は女の子にそつと視線を向けている。食事を始めてから一言も喋ってはいないその小さな影は一口食べてはチラリ、もう一口食べてはチラリと何かを探る様な目で男の様子を窺っていた。

「……、……、……、……、」

チラツチラツと怪しい影は何度も横目で男を見ている。決して会話を混じりたい、何かを心配している、自分に気付いて欲しいなどといった可愛らしい視線ではなく、その反対、どす黒いありとあらゆる負の思念が渦を巻いたような二つの凶眼がそこにはあった。この世に現存する全ての闇を吸い込んだかのようなすどい眼光は平和な食卓にはこれでもかと言うほどに似つかわしくなく、いかに腹を空かした猛獣でさえも尻尾を切り落として逃げるしかないと思わせるほどの物であるのかもしれない。いずれにせよその暗き双眸めくろは最上の怨敵おんてきを純粹な殺意をもって惨殺するかのような悪鬼のごとき眼差しであった。

「……………」

女性はその様子をしっかりと目に焼き付けてから困惑した顔で男のほうへと顔を向けた。

「……………」

だが、男はただ黙って首を軽く横に振るだけで、その様子は俺に振るなとも、諦めろとも、いつものことだとも取れる仕草であった。それきり男は何も反応を見せずもう一度スープを啜ろうとお椀を口に持っていく。

それを見て女性も肩を落ししながら湯のみを持ち上げお茶を喉のどへと流し込む。入れたときは熱かったそれも時間がたち、飲むのにちょうどいいくらいの温度になっていた。

そのまま女性は固い雰囲気をお茶で濁すかのようにゆったりと湯のみを傾けていった。その時、

「殺アアアアアーーーー!!」

ゴバツ

突如、女の子が奇声を上げて男の方へと飛び掛かる。それに女性
は驚いて湯のみに茶を戻すように吹き出してしまった。気管と鼻に
お茶が入り苦しそうに咳込む。暫く俯きながら息を吐き出して、女
性は涙目になった眼差しで二人を見上げた。

「……………」

「ぐぬぬぬぬ……………」

二人は箸と箸を交差させ鏝せり合いをしているかのように硬直を
保っている。

女の子はスツと箸を引き戻して硬直を解除してからもう一度箸を
男の前にある皿、今日の主菜である肉料理へと突き刺すようにして
箸を向ける。だが男はそちらを見向きもせずスープを啜りながら
自分の箸で攻撃を受け止める。

「チイッ!」

女の子は何度も男の前の皿へと箸を伸ばすが男は悠々とそれを食
い止めていた。カツカカツと小気味のいい音が部屋に響く。

「く、くそ!おっさんの目は心眼か!」

「俺から肉を奪うにはあと十年は必要のようだ」

「ぬかせー!」

女の子は男の首元へと手刀をはなつ。だが素早くはなたれたそれ
を男は顎の下で挟み込むようにして防御するとともに女の子の手の

動きを封じてしまふ。

「くたばれー！」

「む」

だが女の子はその拳勢を緩めようとはせず、もう一方の手で男の顔面へと正拳を叩き込む。

ズドム！

はずであったのだが、その拳は男の手のなかへと吸い込まれるようにして防^{ふせ}がれてしまふ。

男はそのまま女の子の手を握りしめ、反対の手刀をはなつた手も掴み上げ宙吊りにした。

「く、この！せやあ！」

女の子は膝までしかない足でキックをしようとするが残念ながらリーチが足りない。

「すまない、食事中だが少し席を外すぞ」

「はあ」

男は女性に断りを入れたあと廊下の方まで女の子を宙吊りにしたまま持っていった。

「……………」

女性の目からは廊下の奥の様子は見てとれない。ただ廊下からは「あ、ちよっやめっさっきの謝るから、ね？あ、コラバカ！そんな

とこ触るなエッチヘンタイ！ああ！やめ！あ！だめえ！にやつ！は
！ヤーツ！ハーツ！ハアアーツ！！」などと言う悲鳴だけが聞こ
えてきていた。

暫くすると男だけが部屋のなかに戻ってくる。

「…………… いったい何があったんですか」

女性は呆然ほうぜんとしながら問い掛けると

「脇腹をくすぐって気絶させた」

との返答が返ってきた。「はあ」と女性は呆れたあきような声で返事
を返す。

「すまん。いつもこうなんだ」

男が謝りを入れると「はあ」と再び乾いた返事を返す女性。それ
に男は苦笑をしながら食事を再開することにした。

「……………？」

ふと、放心していた女性の耳にかすかな音が聞こえてくる。女性
はゆっくりと首を動かして廊下を見やる。数秒、その状態で固まっ
ていたが三度みたひ「はあ」とため息のような声を発した後、女性も食事
を再開することにした。

廊下から漏れた声は次の通りである。

「この恨み……。晴らさで……。おくべきかあ……。」

その呪詛のろいのような声が漏れた後はもう何も廊下から音が聞こえてくることはなかった。

五話目【衝動】（前書き）

久しぶりも何もないくらい間を空けての投稿。

ゴメンナサイ。m (|) m

今回は行数を結構空けながら書いて見ました。

見やすいのかその逆か…。

多少、行を替えながらやったほうがいいのかもしれませんが、空けすぎもイライラの元になりそう。

書くのは難しい。

五話目【衝動】

夜。

草木眠る丑三つ時。

女性の家。2階の一室。

部屋から声が聞こえた。

微かな微かな小さい声。

ひそやかにひそやかに。

誰に聞かせる訳でもなく、
つい漏れてしまった言葉。

「……す」

窓からは月明かりが漏れ、僅かながら部屋をぼんやりと照らしている。

作りは和室。中には、今日泊まることになった二人の荷物が、部屋の隅にぼつねんと置かれており、部屋の中央には二つの布団がしかれている。

ほかにはこれといったものは見当たらない。非常に片付けられた簡素な部屋だった。

すう。とゆっくり、音を立てずに影は進む。

影は徐々に徐々にと布団の膨らみへと近づいていき。

その直前に到達したところで。

すっ。

と、手に持っていた刀を鞘から引き抜いた。

窓からはわずかに月明かりが部屋の中に入り込んでいて。

淡い、光りによって、刀身が照らし上げられた。

刃こぼれはなく、一切の無駄がないその身。

血による曇りもない。

白刃。

それは、斬るためではなく。

調度品としてそこに置き、場を飾る用途の物に見えた。

「……………」

影は刀を一度、天井に向けて構えたあと。

逆手に持ち替えて下へと向けた。

「……………」

静かに息を吸って、肺がある程度膨らんだ所で、呼吸を、止める。

柄を強く握りしめた。

全身を強く反らし。

それとともに腕に大きく唸りをつける。

全身は引き絞った弓の様に、限界まで引き延ばされる。

「……………」

ためを一瞬。そのあとにさらに体につなりをつけながら息を吸い。

一気に反動で体ごと沈め込む様に。

影は刃を、突き刺すように振り下ろす。

「……………」

刃は抵抗なく、深々と根本まで突き刺さっていった。

反応は、ない。

一撃で仕留めたか、布団からは動く気配がなかった。

「……………」

影は刀の柄から手を離し布団の横へ、倒れ込む。

とさり、と畳みに仰向けに寝転がった。

わずかに射す月明かりが影を照らします。

白い服。

上下ともに揃いの寝巻き。

膝から下は無い。

それはまるで闇に浮かぶ霊の様にも見え、足がないぶん、よりいっそう小柄な体躯たいくに見えた。

腰まで伸びた髪は月明かりによって、ぼんやりと青白く光って映る。

女の子。

女の子はぼんやりと天井を見ている。
何を見ているともつかない。

ただただ、そのまま脱力しきった体でのんびりと横たわっている。

「……………ケホ」

布団から咳込む音がした。

女の子がそちらに目を向けると、男が身じろいで布団から身を起
こそうとしている所だった。

女の子は男には何も言わず、部屋にもうひとつ敷かれていた布団
に潜り込む。

そのまま眠りについた。

六話目【二人の素性】（前書き）

久しぶりに投稿。何度読み直しても幼稚な小説であると思ったり。これからの展開は全く考えずに適当にやっていますかりねえ。

設定をいろいろどうするかを考えないといけませんかね…。

しかし自分でもシリアスにしたいのかギャグものにしたいのかわからぬ作品であります。

設定もあんま考えてない。シリアスかギャグかもあやふや。ジャンルの冒険も合ってるのかわからぬ。

でもまあ、気楽に続けたいと思ってます。

22 / 10 / 12 新潟のアヒル

六話目【二人の素性】

胸に衝撃を受けた。

深夜、眠っていた男は意識を取り戻す。

「……………」

夢の中を朦朧せうろうとたゆたっていた男はぼんやりと目を開ける。

木目模様の板張りの天井が見えた。月明かりを受けやや青白く見える。

「……………」

ふと、首を動かして横を見ると女の子が畳みの上で倒れていた。

それを見て男は布団から身を起こそうとして

「……………」

刀が胸に突き刺さっているのに気がついた。

「……………」

男は柄を掴み、引き抜く。

白刃。一瞬透明に見えるほどに汚れのない刀身が目映る。

男は首をかしげながら近くに転がっていた鞘に刀を納めた。
女の子を見やる。

「……………」

いつの間にか布団に潜り込んで寝息を立てていた。

「早い……………」

男は女の子の寝姿を暫くボーツと見る。

小柄な体を丸めてすうすうと寝息をたてながら安らかに眠っている。

旅続きでもあった。疲れていたのだろうか。

「……………」

ふと、男は布団から出て女の子の方に近づいた。

女の子に手を伸ばし、その頭をゆっくりと撫でる。

女の子は身じろぎ一つしない。穏やかに眠っている。

「……………」

何を思ったか男は女の子の顔へと手を伸ばし

「……………てい」

鼻をつまんだ。

「…ん」

女の子は少し息苦しそうにしたが、直ぐに口での呼吸に切り替えて窒息をのがれる。その様子を見て男は

「……………」

微かに笑みをこぼした。

男は部屋の外に出てそばにあった階段を下っていく。

真夜中のため視界は完全に暗闇に塗り潰されている。男は目をこらし、足元に気をつけながら、あまり音を立てない様にゆっくり降りていった。

「……………」

ふと、階下から声が聞こえてきた。

「……………ええ……………」

女性の声だ。

男はそのまま階段をそろりそろりと降りて行く。

「……言われた通り……ち……どうする……」

少しずつ距離が縮まり、段々と声が聞こえるようになってきた。男は耳を傾ける。

「3万。最初にそう言った。……。そう、わかった。それで……」

男はつい、立ちどまり女性の話し声に聞き耳をたててしまう。

「うん……うん……かたな……？あの人の……？うん持ってた……あれが……？」

男は声をもう少し聞こえる様にそろり、と足を動かした。意識を女性の声に集中し、さらに階段を下る。

「それで……ああ、素性が調べ終わった？うん……」

男はさらに一段と階段を下る。意識は女性の声に傾けたままだった。

「……あ。」

だから

「ダイ・ロウ……？」

そのせいで

「それが本名？私にはダイ」

男は

「。。」

足を踏み外した。

一瞬の間。体が空中に浮かぶ。男は体をよじってなんとか体勢を直そうとする。そして見事に

ドゴンー！

「…っ何!？」

成功。顔面から着地することに。

凄まじい音に女性が気付く。男は空中を縦にきりもみ回転していた後にうつぶせで廊下に倒れ、動かなくなった。

「……………」

あまりのことに女性は暫く動けなかった。

少しの間を開けて、動かなくなった男に恐る恐るといった歩調で歩み寄る。

「……………大丈夫ですか……………」

女性は虫の息ほどにか細く小さな声で語りかけて、男の肩をチョンチョンと突く。

「……………返事してください……………」

暫く待ってみるが応答はない。女性は人差し指と中指を男の首筋に当てる。

「あれ……？本当に死ん……っ！」

女性が指を当てて数秒したところで男が身を起こした。

「……」
「……」

二人は無言で見つめ合う。その様子はわずかな間、時間が止まっているかのよう。

「……」
「……」

空気が固まった。男は斜め上の宙に視線を向け、女性は首を横に向け、床を見た。

「……あーっと」

その中で、先に声を発したのは

「その……トイレに行こうとしたんだが、その、階段を踏み外して……な」

男。

「……明かりをつけなかつたんですか」

「……いや、スイッチの場所がよくわからなくて……」

女性はふっ、と一息ため息をつき、

「……とりあえず、トイレはこの廊下の突き当たりにあります」

と言って廊下の奥を指差す。

「……そうか……いや、すまなかつた」

男はそう言って軽く会釈えしやくすると廊下の奥の方にそそくさと突き進んで行った。

「……………」

女性は一人暗がりに取り残される。男の姿が闇に飲まれて見えなくなったのを確認して、手に持っていた手の平サイズの物を耳に当て、それに向かって話し始める。

「……………ごめん、聞かれたかも」

彼女はそう言う。声色や表情から心底から謝っている様子に見えた。

眉をひそめ、目を節目がちにして、頭がうなだれている。

それに対して、手に持っていた物からの返答が返ってくる。

『ギャーハハハハハハ！！テメーバツツツツカじゃねー！普通近づいてきたら気付くだろーが！ブアーカブアーカ、ハアーハツハツハツハツ！』

「死、ね」

女性は簡潔にそう言ったあと速やかに通信を切った。が、すぐにまた通信がかかってくる。

「……………」

女性は少しの間、冷やかな目で通信機を見ていたが、やがてボタンを押して耳に当てる。

『……………』

「……………」

『えっと……………』

「……………」

『……………ゴメンチャイ!』

「……………」

『いや、スイマセンでした。許して下さい。悪ふざけが過ぎました。私が悪かったです。本当にごめんなさい。私の友達はおなただけです。どうか嫌われないで下さい。お願いします』

女性は腰に手を当て目をつむってこう答える。

「……………もういいよ。話しを続けよう」

『うい、ありがとうございます』

「……………どこまで話したっけ？」

女性は視線を横にそらして少し首を傾げる。

『男の素性』

「ああ、そうか。ダイ・ロウだっけ」

女性は視線を前に戻し、壁に背を寄り掛けて話しを続けた。

「それがあの男の本名？」

『手配書にはそう書いてあったぜー』

「手配書…？」

『ああ、さつき送って貰った写真で調べたらそれが出てきた』

女性は眉を少しひそめる。

『一家皆殺しの事件の容疑者としてあげられてんな。大体3年くらい前のやつだ』

「…それは事前に教えてほしかった」

『わりい、急だったしな。んでまあ、事件の方も見ると家から夫婦の遺体は見つかったが、その娘の遺体は見つかってないらしい』

「足だけがそこに……」

『残ってたら完璧だったな。まあ、でもダイ・ロウとやらが連れてた女の子の可能性はあるねえ』

「ああ…と、その名前だけど私にはダイゴロウと名乗ってた」

『ダイー！！ゴローウ！！？』

「…っ」

女性は耳から通信機を遠ざける。そして通信機が静かになったところでもた耳にそれを当てる。

「五月蠅い」
Mayfly

「いや、ダイゴロだぜダイゴロン！これ、おっかさんぶざけ過ぎとちやいまつか！」

「黙れ」

「はい」

通信機から声が出なくなった

「………んで今度は女の子のほうだけどなにかわかった？」

「………」

応答がない。

「話せ」

「あい。………あーんと実はあまり調べられなかったんだぜい。そつちは名前とか分かるかい？」

「ミトって言った」

「ミト、ね。そこから調べっか」

「あまり、と言ってたけど何かわかったの？」

「目撃情報だけな。目立つから結構足跡が残ってた。まあ、重要じやねーと思ったから調べてねーっていうのが本音だ」

「ふむ…ま、いつか。そろそろ話し終わる？」

「そだなー。んじゃまた」

通信が切れた。

「……さて」

女性は階段を上がっていく。足音をたてず、ゆっくりと。やがて、その姿が闇に消えた。

夜はまだ深い。

七話目【爆発！】

早朝。

朝もやの中。まだ、あたりは薄暗い。二人は女性の家の前にいた。天気は快晴、まだ日は出ていないが日の出の方向だけは明るく輝いている。

そんな時間帯のこと。

「飛ぶん？」

女の子はカゴの中から気急げに言う。

「ああ」

男はカゴの後ろに何かを取り付けながら肯定した。

「……………」

ふう、と女の子は軽いため息をつき、次の問い掛けを男にする。

「……………死ぬ？」

「……………」

女の子の呟きに対して男の返答はない。カチャカチャとカゴの後ろに何かを取り付ける作業の音だけが辺りに響く。

「……………」

「……………」

女の子はカゴの中からひよこつと顔を出して上から男の頭を見る。男はそれを気にせず作業を続けていた。

「……………」

「……………」

女の子はゆっくりと手を振り上げて

ズバシン！

と閑静な山村に響く大きな音をたてて、男の頭をひっぱたいた。

「……………」

男は無表情で顔を上げる。そこには負けず劣らずの無表情で見下ろす女の子の顔があった。

「……………」
「……………」

男は顔を下げ、再びカゴの後ろに何かを取り付ける作業に戻る。と

ペシッと女の子が男の頭を叩いた。

「……………」

男は一瞬動きを止めたが、すぐに作業を再開する。

ベシベシベシ

女の子は男を叩き続ける。男は構わず黙々と作業を続けた。

バシバシビビシブシブシビビビダダダダダガガガガガガ
ガガガ

「.....」

ボンッ

「ニャアアアア.....フギヤアッ！」

突如カゴが吹っ飛ばす様に前に突き進んでいった。そのまま家の塀
へと叩きつけられる。

「お.....おお.....」

中にいた女の子は「たまりもない。」

「.....つう.....ぐう.....ぬ.....」
女の子はカゴの壁に手をかけ、はい上がるようにして頭を出した。

少し離れた所に拳を前に突き出して固まっている男の姿があった。拳からはかすかに煙りがでていている様に見える。

「……………」

女の子はギロリと男を睨み、

「……………死……………否定……………ボケエ……………」

そう言ってズルリとカゴの中に落ち、力尽きた。

「……………」

男は拳を解いて立ち上がるとゆっくりカゴに歩み寄っていく。そのまま手の届く場所まで行く、と思いきや、その少し手前でピタリと止まってカゴを見た。

「……………」

カゴは長方形の形をしており、大きさは一般的な風呂桶ほど。下部にはカゴを支える4つの車輪がついている。

今、男が立つ位置からでは中を覗き見ることはできない。

「……………」

男は軽く唇を引き締めると、足を一步前に踏み出し、カゴの縁^{ふち}を掴んで中を覗き込んだ。

するとそこからは女の子の頭、

「もるあつたあー!!」

ドンッ!と男の顔が上に吹き飛ばすように持ち上がった。男の顔が空を向く。女の子の体は一瞬、宙に浮かんだあと、カゴへと降りて行った。

「ウツシャア!」

カゴに着地すると女の子は自身の頭突きがクリーンヒットしたことにガッツポーズをとりニヤリと笑った。そのあとで男の方を見る。

「……………」

男は空を見ていた。女の子からその表情は見てとれない。

空には雲ひとつない。まだ薄暗い色をしているが次第に綺麗な水色となっていくだろう。

「…あ」

女の子が横を向くとそちらは日が出始めるときだった。朝焼けで輝いていた空がさらに強い光りで彩られ、そうつこん荘厳と言える景色が顔を覗かせる。

「まぶしい…」

しゃらり

何か音がした。女の子は首を戻す。

「……………」
「……………」

いつの間にか刀を抜いて男が女の子を見ていた。自然、二人の目が合う。

「…んと…」

女の子は軽く口ごもり

「テヘッ」

小首を傾げながらニコツと笑って言った。

「……………」

その後、大きな叫び声が村に鳴り響いた。

「……いただきます」「……」

女性の家の食卓で三人が手を揃えて唱和する。
卓に並ぶのは白飯、野菜のつけもの、茶、以上。昨日と比べると

物足りなく感じる。が、そのあたりのことには二人は特に何も言わずに食べ始めた。

ただし、男は少々渋い顔をしていたが。

「…それで」

女性が話しを切り出す。

「食べたら、すぐに出るのですね？」

「そうなる。本当に迷惑をかけた」

「いや、ホントおねーさん神様だ。あなた様がいなければ私は路上で井戸端会議になっていたでしょう。感謝いたします」

「いえいえ、こちらこそどうもありがとうございます。楽しかったよ」

「…何を言ってるのか意味がわからんぞ、お前」

「頭の悪いおっさんは引ッ込んでろ」

「…アハハ」

昨日に比べるとわりと普通の食事風景。昨日の件で女性は肉を出すのは止めておいたのかもしれない。

「これから、どちらに向かうのですか？」

「都みやこに。仕事の報告をしなければならぬんでな」

「…飛んでいくのかあ……………」

「…急ぐのですか？」

「ああ、それこそ飛んでいかなきゃならんくらいにな」

「…はあ……………」

「……………」？

外。

「雲一つない空が広がる。」

「何ですか、コレ？」

女性はカゴの後ろについてる物のことを男に問い掛ける。

「……よく聞いてくれた……これはな……ジェット、エンジンだ……」

何故か誇らしげに言う男。

「……………ジェットエンジン」

女性は男が言った言葉を繰り返しながら、難しい顔をしていった。

男は女の子をカゴに乗せてゴーグルをかけさせる。自分も荷物が入った袋を背負い、カゴに入ってゴーグルをかける。

「大丈夫か？」

「……………」

男が女の子に語りかけるが女の子は何も言わず、ただただ俯へそむいていた。

「……………」

男は自分の頭を掻いた。

女の子をよく見るとゴーグルに覆おわれた二つの目を強くつむり、唇くちびるを真ま一文字いちもんじに引き締め、体が微かすかに震えているのが見てとれる。

「……………」

男は女の子の背中を撫でて、女性の方を向く。

「世話になった」

「おい！大丈夫か！？」

「~~~~~！！！」

「聞こえてねえ……………」

二人はカゴに乗って空を飛んでいた。ぐうぐうと空気の壁を切って進んで行く。

はるか下に大地が広がっている。大きな山々、ところどころにある田園、そこから近くに焦げたような色をした屋根の数々。

「ふう……………」

男は進行方向に顔を向ける。

山々が途切れて平野になっていて、そこには田んぼが広がっていた。朝日に照らされた穂が風が吹く度にざわり、ざわり、と揺れ動き、波立つように数々の影が線の様に流れては消えてゆく。

その先は地平線になっており、そこから建物の影がほんの少しずつ突き出る様に現れ始めていた。

「……………」

男は膝元ひざもとに目を向けた。

「……………はあ」

女の子が白く枯れ果てた花のようになってうずくまっていた。

「……………」

男は軽く女の子の頭をくしゃくしゃと撫でる。

「…んあー？」

女の子は不満を隠さない気怠い声を出して、男の手を払いのけた。

「目的地が見えたぞ」

女の子はのそりとカゴから頭を出して遠くを見た。先ほどより建物の形がはっきりと見える。それは高い塔の様に見えた。

「……………」

男は眉をしかめた。その様子に女の子が気づいて男の顔を見る。

男は女の子の耳元に顔を近づけた。

「…高度が下がってきた」

「……………」

女の子は半ば倒れ込む様に頭をカゴの内壁にぶつけた。

男はうしろに体を乗り出してエンジンについてるレバーを掴む。

「加速するぞ！」

暴風に負けないよう、大きな声で女の子に伝えたとレバーをぐいと引っ張った。

とてつもなく大きな爆発音と衝撃がカゴの後ろで生じた。

それにとまってカゴが吹き飛ばす様に、否、実際に爆発によって吹き飛んで加速する。

「イーーーーーヤーーーーー！！！」

カゴは暴れ獅子のごとく激しく揺れ動き、女の子が落ちそうになるのを男が抑える。

目的地はまだ遠い。暫くは叫び声が空に吸い込まれていくことだらう。

通信が切れた。

「やれやれ……」

女性はなんとなしに二人が消えて行った空を眺めた。朝日が山を照らす。なんといいことのない風景だ。

女性は踵かかとを返し、家の中へと戻ろうとした。

ドーン

「…ん？」

遠くから花火があがった様な音がした。

「何だ？」

女性が音がした方向に顔を向けると遠くに黒い煙が立ちのぼるのが見える。

「火事？あそこは確か…」

女性は苦い表情をして、通信機を取り出して耳に当てる。暫くその状態でじっとしていたが

「……チッ」

舌打ちをして女性は通信機をしまつ。そして煙が見える方向へと駆け出した。

「ダイ・ロウ……」

一人の殺人犯の名前を呟いて。

七話目【爆発!】（後書き）

久しぶりの更新ですね。数ヶ月ぶりです。なかなか時間がとれないですなあ。というのは言い訳。

久しぶりに小説情報を覗くとお気に入り登録が増えていましたね。こんな数ヶ月も更新していない様な作品を登録して下さり感謝の念が尽きません。ありがとうございます。

ではまた会える日を願って。

平成23年1月23日

八話目【大迷惑】

その都市には、一際高い塔がそびえていた。

周りの建物と比べて3倍4倍ではきかない程、大きく、高い塔。それは床、壁、全て石を幾重にも組み合わせで作られていた。

所々の階には外の景色を一望できるテラスが設けられ、橋が外側に幾つも放射状に伸びている。

その様は木の根が蔓延はつちるように見えただろうか。

塔のいたる所から伸びた橋は、塔の近くに落ち着くものから、遠く離れた町まで続いているものもある。

この橋、下はがらんどろである。

だが組み合わせた石は抜け落ちることなく保たれていて、高い技術と苦労があつて完成させられた物なのだろう。

ただ、建築技術の高さがうかがえるそれも、老朽化は免れまぬがない。現在も橋の手摺り部分の修復をしている大工たちがいた。

「…全く、先人たちはこんなに多く橋を作つてなにがしたかつたんだらうねえ」

「…さあ？フエチかなんかだったんですかねえ？」

先輩と思わしき、大柄な人物が愚痴を吐くと後輩、または部下であるう小男が言葉を返した。

「…橋フエチ？そりゃあ……………なくもねえなあ」

「ええ？適当に言っただけですよ」

「いや、こんな馬鹿げた物作る奴らだ、ありえんこともねえだろう」

「確かに凄いものではありませんよ、修復も大変ですし」

「そうだな、だがこれを作るメリットはあった」

「材料は少なくて済みますよね」

「それもそうだし、下にある物を邪魔しない」

「柱とか以外と邪魔ですしね」

「だが作り過ぎだ。数が煩惱ぼんのうくらいあるんじゃないか？」

「作業量はんぱじゃないですよ」

「作業期間が狂ってやがるしな」

はあ……………と二人はため息をついた。

「ま、仕事あるうちが花だ。キリキリやるか」

「……………あれ？」

「どした？」

先輩の大工が振り替えると後輩の大工は空を見ていた。

「いや、なんつーか、あれ」

後輩は空を指差す。

「あん？」

大柄な男はそれを見て首を傾げた。

塔の中、その中でも最上階に近い階層の一室。

「ふむ……」

人差し指程度の長さのヒゲを蓄えた壮年の男が、窓を背にした所にある机の上の書類を手にとって見ていた。

部屋は四角い個室で彼がいる机の場所は、正面のドアを開けて真っ直ぐ奥に歩いた所にある。

途中、両脇の壁に一面ずらりと様々な書物や書類が並べられている本棚があり、机の後ろには大きな窓がある。

時折、壮年は本棚のほうに歩いて行つては書類を取り出し、軽くめくつて棚に戻したり、または机まで持ってきてじっくりと眺めたりする。

「ふむ」

彼はそう言つては何度か鉛筆を紙に走らせてみて、その文面を見る。

長い間書くこともあれば、短く書いて直ぐに消すこともしばしばある。

そしてまた本棚へ歩き、同じことを何度も繰り返していた。

壮年が机の前に腰かけ一枚の紙を手にとって見ていたとき、ドアがノックされた。

コンッコンッと小気味いい音が聞こえてくる。

だが彼は紙で目の前を覆う体勢で文面を眺めており、ノックには反応を返さなかった。

再度ノックがあった。今度は4回。

……………。

ドアの前にはベレー帽を被った若い男性が立っていた。

腰には鈍器となる短い棒　世間で警棒と呼ばれる非殺傷の武器
を身につけている。

彼は腰に両手を当て、目の前を鋭い眼光で睨む。そのまましばらく待っていたが、部屋から反応は返ってこない。

……………。

彼は小さなうなり声を閉じた唇から漏らし、何となしに腰脇から

警棒を抜きとった。

.....。

再度、正面のドアを見るが物音はない。

彼は警棒を手にしたままドアノブに手をかけゆっくりと回した。

ギィ.....、という微かな音がしてドアが開く。

ドアを開いた先には壮年の男が机の前に腰かけているのが見えた。対面からでは壮年が持つ紙が邪魔して表情を窺うことは出来ない。

ベレー帽を被った男性は沈黙したままの壮年に対し、ゆっくりと歩みよる。

.....。

近くまで来たが壮年は何も行動をしない。ただ、紙で目の前を覆っている。

.....。

ベレー帽は壮年が持つ紙を剥ぎ取るように奪いとった。
紙を退かしたことで壮年の頭が視界に写る。

.....。

頭である。顔ではない。

.....。

ベレー帽からはうなだれた壮年の首が見えた。力なくこうべを垂
れて壮年は机に顔をつけている。

チツとベレー帽は舌打ちした。

壮年のうなじにはピツタリとナイフの柄がくつついていた。
そこから赤い液体が溢れるように流れ落ちていつている。

壮年の足元にはそれが床を這うように拡がっており、服は真っ赤
に染まり上がっていた。

ベレー帽は目だけを動かしあたりを探る。さぐ

.....。

窓、窓際のカーテン、本棚、机の裏、天井。順番に見るが特に変わったものはなかった。

それを確認するとベレー帽は軽く警棒の上に投げ頭上で掴みとった。

一瞬硬直し、壮年の頭を目視する。

片手の上段の構え。

……。

警棒を強く握りしめ、うなりをつけたそれを一気に壮年の脳天目掛けて振り下ろす

「ストロップ!!!」

ベレー帽は寸止めをした。

声は目の前の壮年から。

「……怖い怖い」

そう言って顔を上げた壮年は苦笑いをしていた。

それを見て、ベレー帽は警棒を腰脇にしまっ。

「毎度のことながら悪ふざけはよして下さい」

そうベレー帽は言った。その様子は怒ってる風でもなく淡々としている。

壮年は笑顔で彼を見ながら、自分の首にある偽物のナイフをとった。

「ふふ、よくできてるんだよ、このナイフ。刃が引っ込むのはおもちゃのナイフと同じだが、見えない糸を引っ張ると液体が出て来る様になっている」

ホラ、と透明な糸を引っ張って赤い液体が柄から滲みでる様子をベレー帽に見せる。

.....。

ベレー帽は感情のない目つきでその様子を見た。

それを見て壮年はまた口元に微笑みを湛^{たた}えて、ナイフをしまっ。

「さて、では、用件を聞こうか？」

壮年は軽く微笑みを浮かべたまま問い掛けた。

「ダイゴロウ殿がもうすぐ到着します」
「ほう」

ベレー帽の言葉を聞いて壮年の目つきが変わる。口元は笑ったままだが、眉が下がり、目が鋭くなる。

「用件は以上です。失礼します」

ベレー帽はそう言って軽くお辞儀をして、部屋を出ていこうと背中をむけた。

「わかった、ありがとう」

そう壮年は彼の背中に声をかけた。

ベレー帽はドアノブに手をかけたところで一度止まって、

「あと20秒ほどです。お気をつけ下さい」

と言って部屋を出ていった。

「…ふむ」

壮年は満足げな顔で顎髭を撫でた。

「…毎度いたずらしても、緩まない。まったくできた部下だよ…」

そう独り言を言う。

「……………」

壮年は椅子から立ち上がり窓に顔を向けた。そこからは都市の外側にある沢山の田園風景が見えた。

田園の穂が風なびいている。

「…眩しいな」

壮年は日差しに目を細め、外の風景を見ながら窓際に寄せているカーテンまで歩く。

「……………む？」

そこで壮年は疑問の声を漏らした。

「なんすかね、アレ」

「鳥、か？」

「鳥にしちゃ大きいような気がしますけど」

「確かにでかいような気がするがアレくらいならいるんじゃないか？」

「鳥ですかね」

「鳥以外ないだろ」

大工の二人は空を眺めていた。正確にはそこを飛ぶ何かを。

「なんかこつちに来てませんか？」

「来てるような気がするな」

「本当に鳥ですかね？」

「流星とかならシャレにならん」

「橋をぶっ壊してくれたらシャレになりませんね」

「……………」

「……………」

一瞬の沈黙。

「まさか」

「ですよねえ」

ハツハツハと二人の大工は笑うがその表情には陰りが現れていた。

「……」
「……」

二人は再び沈黙する。空の一点を見ながら。

「おい」

先輩の大工が声をかける。

「はい」

後輩の大工が返事を返す。

「来てるな」
「来てます」
「ぶつかるか？」
「わかりません」
「今、爆発したな」
「しました」
「なんだありゃ」
「わかりません」
「どうすつか」
「どうしましょう」
「……」
「……」

また二人は口を閉ざす。もう空笑いも漏らさない。ただただ空の
一点を凝視する。

「おい」
「はい」
「どうやら」
「はい」
「こっちはぶつからなそつだ」
「はい」
「だが」
「…はい」

二人は『それ』から視線外し、塔の上のほうを見上げた。

「」
「」

そして先輩の大工が一言漏らす。

「行ったな」

壮年は窓の外の景色を見ていた。

「」

眉を下げ、目を細くした。逆光で見えにくい。首を伸ばしてよく目をこらす。

「……っ！？」

彼は目を見開いた。目を素早く擦ってもう一度よくみる。

やがて彼は窓を見ながら一歩、二歩下がり、

「ちょっと待てい!!」

そう言って180度回れ右して一気に駆け出した。

「デウハアアツ!?!」

だが、それを遮るが如くそびえ立つ机にぶつかり突っ伏してしま
う。

「……ッ!」

彼は言葉にならぬ悲鳴を上げる。机を乗り越えようとした。

その瞬間。

「」

彼は何も言えなくなり、動けなくなった。

「
」

影が差した。窓からの光りは何かによって遮られている。壮年の男は一瞬で振り替えた。

「
」

ゴシャツと鈍い音を立てて窓に亀裂が入る。亀裂はみるみる内に窓全てを覆った。

「
」

彼の目は大きく見開かれ、顎が外れんばかりに口が開かれていた。

「
」

そして窓が、四散する。

彼はくじけない。齒を食いしばり足元に力を込める。床が凹んだ。

「！」

彼は諦めない。拳を握り閉める。手からは血が出ていた。

「」

彼は逃げない。腕はすでに衝撃波でズタズタになっていた。だがなお、力を込めるのを止めない。

彼は勇者であった。何者にも屈さぬ勇者であった。

自身の身が危険であろうと止まることをしない。

天が何を語ろうとその心を曲げることをしてしない。

今の彼なら例え猛獣の巣。敵陣の砲弾飛び交う中。

どんな大難においても、どんな死地においても、その心揺れることなく、飛びこみ乗り越えて行っただろう。

「」

ただ、さしもの彼も目の前から聞こえた声には微かに心^{かす}が折れそうになった。

加速

「……………」

壮年は、吹き飛んだ。

口元は、微かに笑っていた。

八話目【大迷惑】（後書き）

はい、新キャラを吹っ飛ばすだけの話しでした。

私はいつたいなにがしたいのやら（笑）

こんにちは、とても久しぶりの更新となる新潟のアヒルです。
変な名前だと思ってますが、変える気はありません。

遅れに遅れましたね。壮年がベレーと会話したあと即座に吹っ飛ばして終了のはずだったのに…。

色々あって塔の外観、二人の大工、壮年のいたずら、カゴとバト
る壮年など追加が一気に増えたせいで書き直しになったのはよき思
い出でしょうか。

特に最後は全く入れるつもりなかったのにノリでつい入れてしま
いました。

新キャラのくせに一人歩きし過ぎです。

…とは言え更新しなかったのは私が怠け者だからです。もし楽し
みにしてた人がいるなら申し訳ない。

次はもうちょい早く出来るかな。

期待はしないで、忘れた頃に更新すると思っ
ていて下さい。冗談
抜きで（笑）

ではまた。

平成23年6月14日新潟のアヒル。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4676k/>

手押し車の二人旅

2011年9月18日02時58分発行